

令和6年度第3回

さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議

会 議 録

日 時：2024年11月13日（水）午前10時開会
場 所：TKPガーデンシティPREMIUM札幌大通

1. 開 会

【玉腰座長】

おはようございます。

それでは、時間になりましたので、令和6年度第3回さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議を開催したいと思います。

お忙しい中、お集まりくださり、ありがとうございます。

本日、司会をさせていただきます玉腰です。

これまでの第1回会議、第2回会議でも非常に活発にご議論いただきましたが、本日も引き続き、よろしくお願いいたします。

2. 委員の紹介

【玉腰座長】

まず、報告事項に先立ちまして、今年度初めて会議に出席される委員がいらっしゃいますので、事務局からご紹介をお願いしたいと思います。

【里政策企画部長】

皆様、おはようございます。

政策企画部長の里でございます。

本日も、お忙しい中、また、お寒い中、朝早くからお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

私から、本日初めて顔を合わせます委員の方をご紹介させていただきます。

札幌商工会議所副会頭の中田隆博委員でございます。

【中田委員】

おはようございます。

委員としては令和4年度から出席させていただいてはいますが、今年度は初めてでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【里政策企画部長】

本日の会議ですが、社会保険労務士法人MIKATA副代表の大谷朋子委員と北海道銀行地域創生部次長の佐々木聡一委員のお2人が所用によりご欠席となっており、今日は計13名の委員の皆様からご意見を伺わせていただきます。

3. 報告事項

【玉腰座長】

では、議事を進めていきたいと思っております。

本日は12時の終了を予定しておりますので、ご協力くださいますようお願いいたします。

まず、報告事項(1)の令和6年度第2回さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議における主な意見について、及び、(2)の第3期さっぽろ未来創生プラン(案)について事務局からご説明をお願いいたします。

【田村企画課長】

皆様、おはようございます。企画課長の田村でございます。

私から資料のご説明をさせていただきますので、よろしくをお願いいたします。

ご説明に入る前に、配付資料の確認をさせていただきます。

次第のほか、資料1の委員名簿と座席表、資料2の令和6年度第2回さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議での主な意見、資料3の第3期さっぽろ未来創生プラン(案)の概要、資料4の第3期さっぽろ未来創生プラン(案)を配らせていただいております。

まず、前回の振り返りということで、資料2から順にご説明していきたいと思っております。

上から順に参ります。

はじめに、1番ですが、離婚率と合計特殊出生率の間には一定の相関があるということで、良好な家庭環境を築くための取組、出会いを応援するような取組が必要であるというご意見です。

出会いの応援という点では札幌市によるオンライン結婚支援センターによる結婚の支援をしていますし、良好な家庭環境という点ではワーク・ライフ・バランスの促進などの観点から家事や育児のシェアに関する啓発動画や冊子を作成しております。こちらについて引き続き取り組んでいきます。

2は、若者や子育て世帯に向けた印象が強い、子育てや結婚していない人を含めた視点をとというご意見です。

札幌市として目指すのは、誰もが札幌で暮らすことに幸せを感じられるよう取組を進めていくことで、後ほどご説明いたしますけれども、プランの目指すべき将来の姿にこの趣旨を追記いたしましたほか、前回にご紹介しました札幌Well-being指標の中にも多様性という観点からの設問を考えているところです。

次に、質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりについてです。

3は、賃金に対するご意見です。

札幌市は、国に対し、積極的な賃上げや人材投資に取り組む事業者などにそのコスト上昇分を適切に価格転嫁できる環境整備への支援の継続を要望しておりますとともに、その支援に取り組んでまいります。

4は、子育てに関する費用についてのご意見です。

少し古いものになるのですが、平成21年の内閣府の調査の結果を載せております。小学生1人当たりの当時の年間子育て費用額は約115万円、保育所・幼稚園児1人

当たりの年間子育て費用額は約122万円という数字が出されておりました。

今と比較しますと、例えば、当時、消費税が5%でした。また、物価上昇などもございますので、実際の額としては増えているところもあるかもしれないのですが、その一方で、医療費助成が拡大していますし、児童手当や幼児教育、保育の無償化などの実施によりまして、当時よりも実質的な負担は下がっているところもあるのではないかと考えております。

申し上げたとおり、調査としては15年も前のものとなりますので、来年度以降、札幌市の中で子育て費用額のモデル構築のようなことも含め、検討を進めてまいりたいと思っております。

5は、GX、半導体産業についてのご意見です。

後ほどご説明いたしますが、プラン中に取組の記載も入れております。

次に、結婚・出産・子育てを支える環境づくりについてです。

6は、部活動などの経験の格差、また、そういう場の不足というご意見です。

部活動については、現在、外部人材の活用などにより、体験や経験の格差が生じないよう、機会の確保に向けて取り組んでおりますとともに、札幌市の子育てポータルサイトにおいて親子で遊びに行けるスポットを紹介しているほか、外で体を動かすという点からプレーパークなどもご紹介しております。

プレーパークは、特に冬に体を動かすという点でも活用できますし、柴田委員が理事を務めていらっしゃるE-LINKも取り組んでおられます。

7は、子育てのしやすさや支援の中身など、家族向けの情報を分かりやすく道外の方に伝える取組の必要性についてのご意見です。

後ほどもご紹介いたしますけれども、ポータルサイトをつくることなどにより、子育てのしやすさや支援内容をはじめとして、例えば、冬の暮らし方に関する情報を伝えるということを検討したいと思っております。

次に、若い世代へ向けたアプローチの強化についてです。

8は、大学連携に関する取組の重要性についてのご意見です。

本日もオブザーバーとして北海道庁の方にも来ていただいておりますけれども、人口減少対策における北海道と札幌市の連携は2018年頃から継続しております。それ以前からも個別の取組に関しては連携しておりましたが、連携共同プログラムという枠組みの中で大学連携に関する取組についても連携を深めていければということで、検討を進めているところです。

次に、人口減少適応プロジェクトについてです。

9は、人口減少への適応の話で、札幌Well-being指標に関して、指標の項目名称があまり馴染みのない表現で、分かりにくいといったご意見です。

今まで、行政では、客観指標や行政評価といった観点のものが多かったわけですが、少し視点を変え、個々人の主観的な視点ということで札幌Well-being指標を導入

したいと考えております。

ご意見としては市民に伝わらないと意味がないということだと思います。後ほどご説明いたしますが、表現も地域社会の寛容性を多様性という言葉に、日々是好日という表現を安らかな毎日というように、比較的平易な言葉に直したところです。

10は、外国人の数についてのご意見です。

後ほど、プラン概要の説明の際にご紹介をさせていただきたいと思っております。

11は、人口減少のプラス面のご意見です。

こちらについても記載をさせていただきましたので、後ほどご紹介いたします。

資料2については以上でございます。

次に、資料が一つ飛びますが、資料4の本書の45ページ、46ページをご覧ください。

、我々の方で実施した外国人に関する調査についてご報告をさせていただきます。

まず、45ページの左側のグラフは札幌市の外国人人口の推移です。

過去、コロナ禍で1度人口が減少しましたが、基本的には右肩上がりとなっております。令和6年の札幌市の外国人人口は1万7,867人です。

一方、右側のグラフをご覧ください。政令指定都市との比較をしてみますと、総人口に占める外国人の割合や生産年齢人口に占める外国人の割合、それから、GDPに占める割合など、どの指標でも政令市の中で下位に位置しております。

続きまして、46ページをご覧ください。

左側のグラフは、札幌市の労働人口はどれくらい不足するかについて概算を行ったものです。GDPをベースに、国の新産業構造ビジョンの変革シナリオで示している経済成長をしていくと仮定しますと、左下のグラフのとおり、2050年に22万人ほど不足するのではないかという結果になっております。

結構大きいという印象を持たれるかもしれませんが、そもそも、今の人口推計で2050年の札幌市の人口を見ますと、生産年齢人口自体が30万人程度減少すると推計しております。それと比較し、少ないと見るか、多く見るかは議論のあるところかなと思いますけれども、いずれにしても将来的な人手不足の対応は必要で、様々な観点からのアプローチが必要ということが改めて浮き彫りになったものと思っております。

また、先ほどの政令市との比較を見ても、余地といいますか、ポテンシャルはまだあると思っておりますので、特に外国人労働者の増加というのは重要な観点になると思っております。

それから、右のグラフですが、外国人の労働者がどれくらい増えていくのかの推計です。

下の黒い実線が今までのトレンドのままで労働者が増えていった場合で、2050年には2万4,000人ぐらいになるのではないかという結果になっております。また、上の青の実線は、先ほども出しましたが、GX、半導体などの取組が進んでいき、GDPが伸びるとすると、これぐらいの外国人の方に来ていただけるのではないかという結果になります。同じ、2050年では、約8,000人増の3万2,600人と推計してお

ります。

先ほどのとおり、外国人と共生というお話はもちろん、外国人に選ばれるための環境づくりが非常に重要であると考えています。

それでは、概要版を用いまして、全体の内容をご説明させていただきます。

申し訳ございませんが、前回ご説明した部分は割愛させていただき、新たに追記したものと先ほど頂戴したご意見から変更したところなどをご説明したいと思います。

1 ページの変更点は有りませんので、省略をさせていただきます。

2 ページをお開きください。

目指すべき将来の姿という黄色の部分です。

下から2番目の誰もが幸せを感じることができ、生涯を通じて健康的で生き生きと活躍しているというところです。結婚や子どもを希望されない方、あるいは、高齢者や外国人も含め、誰もが幸せを感じることができることをさっぽろ未来創生プランで目指しているということを示させていただきました。

それから、前回の資料では、緩和戦略の数値目標を概要版に記載しておりませんでしたので、記載しました。なお、1回目でお見せした数字から変更はございません。

次に、3ページの総合戦略編の具体部分です。

前回、例えば、質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりという茶色の部分についてはお示しをしていましたが、赤字の字の部分を追記させていただきました。

まだ検討中のものも含め、令和7年度事業としてどういったことができるかを考えておりまして、そこを中心にご説明してまいりたいと思います。

先ほど申し上げましたGXと半導体のことについて追記をさせていただきました。それぞれ国家戦略特区を活用した規制改革等の推進、情報の発信、窓口開設、GX産業の集積、金融機能の強化、集積に向けた取組を進めてまいりたいと考えております。それから、半導体関連では、立地促進やトップレベルの人材育成を進めてまいりたいと考えております。

右側に移りまして、多様な人材の確保の3点目の人材確保に向けた魅力発信についてです。

人材不足業界のイメージアップや魅力発信を進めてまいりたいと思っております。特に、報道等でもよく話題になっておりますが、市内の路線バスの運転手の確保に関する取組を進めてまいりたいと思っております。

4 ページをご覧ください。

訪れる人・住む人にとって魅力あるまちの推進についてです。

観光客の受入れ体制の充実として、オーバーツーリズムの未然防止や交通利便性の向上に向けての取組を進めてまいりたいと考えております。

続きまして、右側の結婚・出産・子育てを支える環境づくりについてです。

先ほども申し上げましたが、一番上にオンライン結婚支援センターのことがあります。また、中段の多様な保育サービスの提供ということで、全ての子育て世帯が就労要件にか

かわらず、未就学児を柔軟に通園させるという、いわゆるこども誰でも通園制度、あるいは、放課後の居場所づくりということで、放課後児童クラブでの昼食提供を拡充の検討を進めているところです。

5ページをご覧ください。

左側の子どもが健やかに育つ環境の充実についてです。

子どもが学ぶ環境の充実、あるいは、右側の子どもを支える環境の充実です。前回、ご意見が出されました子どもの体験や経験の格差を少しでも是正するため、学習支援や子どもたちの意見形成、意見表明支援の実施、それから、給食提供ということで、長期的には調理師の確保の問題などこういった形で給食提供をしていけるのかの検討も考えております。

6ページをご覧ください。

若い世代へ向けたアプローチの強化についてです。

左側で赤色の字にはなっていませんけれども、様々な出会いの創出ということについて大学との連携というご意見もありましたので、それを強化してまいりたいということです。

それから、右側の若者に選ばれる札幌づくりの2点目の移住促進のところでは、

これもご意見を頂戴していたかと思いますが、特に若者をターゲットとした移住情報を中心に、ポータルサイトの活用などによる情報発信、地域の魅力発信の強化、あるいは、地域おこし協力隊の活用なども検討してまいりたいと考えております。

それから、目指すべき将来の姿・子育て等の魅力の発信についてです。

これはご意見を頂戴したところですが、さっぽろ未来創生プラン、そして、それ以外も含め、目指すべき将来の姿を市民に、特に若い世代と共有していくこと、あるいは、子育てのイメージアップをできるような情報発信、そして、子ども、子育てのよさ、喜びみたいなものについて、若い世代だけではなく、幅広い世代で共有、共感できるような取組を進めてまいりたいと思っております。

その他、細かいところは省略をさせていただき、最後に7ページをご覧ください。

人口減少適応プロジェクトについてです。

先ほど申し上げましたとおり、指標の大きな項目の名称を変更しています。また、ポータルサイトを使い、いろいろな方に取り組んでもらって、最終的に凸凹みたいなものをどのように札幌市の取組に生かすか、活用していくかを引き続き考えていきたいと思っております。

それから、右に移りまして、外国人材に選ばれる環境づくりについてです。

これが大事だというご意見をいただきましたが、外国人雇用の拡大に向けた取組を促進していきたいと考えております。例えば、外国人を企業に雇用していただくため、セミナーを実施するほか、成功事例の発信、中小企業と留学生とのマッチングをするなど、定着に向けて取り組んでいきたいと考えております。また、暮らされる方の生活の安定も含めた日本語習得の支援、医療受診のサポート体制の拡充などを進めていきたいと思っております。

ます。さらには、外国人労働者の方と一緒に来られる家族のため、国際教育プログラムを
実践するインターナショナルスクールの誘致の検討を考えております。

最後に、持続可能な都市のあり方の検討についてです。

赤色の字にはしていないのですけれども、上から二つ目です。環境負荷の低減や過密性
の緩和など、人口減少により生じるある意味でのプラスの側面もあるというような表現を
追加させていただいております。人口減少に適応していくことが皆さんにとって必ずしも
マイナスのことばかりではないのですということ表現させていただきました。

資料のご説明については以上ですが、今後の流れについてご説明させていただきます。

本日の会議のご意見を踏まえ、札幌市の中で議論を深めていきたいと考えております。
あわせて、札幌市議会での議論も経て、最終的に12月末から来年1月ぐらまでにかけて
市民の皆さんに向けたパブリックコメントを実施したいと考えております。そちらでい
ただいたご意見、あるいは、それによる修正箇所についても皆様に共有させていただき
たいと考えております。

長くなりましたが、私からの説明は以上です。

4. 委員による意見交換

【玉腰座長】

1回目、2回目で皆様からいただいた意見を反映し、さっぽろ未来創生プランの案がで
きた段階かと思いますが、今のスケジュールで言うと、この後も意見を取り入れる余地が
あるかと思いますが。そこで、今ありましたご説明について、1時間ほど、皆様からご意見
を頂戴したいと思います。

今までと同じく、それぞれの方からご意見を伺い、そこから発展させていきたいと思
いますので、前の方の意見を受けてご発言を検討していただければと思います。

また、前回、概要を見ながら話をしていたのですけれども、最後の7ページの人口減
少適用プロジェクトの話があまりできなかつたように思っておりますので、今日はそこ
から始め、その後前に戻りたいと思います。

7ページをご覧になって、こんなことを足したらいいのではないか、こんな視点があ
つたらいいのではないかなど、何かご意見があれば、ぜひお願いしたいと思います
が、いかがでしょうか。

【入澤委員】

まずは、感想です。

札幌Well-being指標について、前回、私が分かりにくいと言いましたが、と
ても分かりやすくなっています。ありがとうございます。

その上で、外国人のところについてコメントしたいと思います。

45ページと46ページの他都市に比べての外国人の割合という表現についてです。

大阪、京都、名古屋が多いわけですが、外国人と一言と言っても、その国はどこなのだろうということ。多分、歴史的にも大阪は多いでしょう。一方で、浜松、川崎、横浜は労働者としてブラジル人が自動車工場で働いているなど、いろいろとあります。

このようなことから、外国人と一言で言うところとちょっとぼやけてしまうような気がしております。札幌はどういう国の人によってどういう仕事をしてもらいたいのかを定義し、政策を組まないといけないように思います。外国人と一言と言っても、いろいろな国の方がおりますし、いろいろな文化を持っています。

この間、介護事業者の方々とお話をしているとき、ミャンマーの方やネパールの方がいる中でインドネシアの方を積極的に採用しているということをおっしゃっていた。インドネシアでは建設現場の方々は、給料がすごく高いので、オーストラリアに行ってしまう。ところが、介護系の方は日本に来ることが多いのだそうです。なぜかという、インドネシアの方は敬けんなイスラム教徒だからです。そういう宗教信仰心のある人というのは非常にお年寄りを大事にするというマインドが高いらしく、ミャンマーの人に比べるとインドネシアの人のほうが熱心に働くらしいのですよ。ところが、イスラム教徒がゆえに、食事がハラールなのです。そこに対し、まだやるのが結構あるということをお聞きしたのです。

そのため、どの国に対し、どう考えるかです。全体の政策の中に入れるのは難しいでしょう。ただ、一言、その国の文化に応じた対策をするというようなことがあるといいのかなと思えました。

【玉腰座長】

ありがとうございます。

今のことに、ご経験のある、あるいは、お気づきのことがある方はお願いします。

【吉岡委員】

今、外国人材についてのお話がありましたけれども、概要の7ページの右上に外国人材に選ばれる環境づくりということでまとめられております。

私は子育て支援が専門ですので、外国人材に選ばれる環境づくりの黒丸の一番下の外国人児童への支援ということで、外国人の子どもたちのための様々な手厚い対応を考えていくと載っていることについて話したいと思えます。

子どもへの支援も重要ですが、その周りの保護者に対する支援も非常に重要になってきておりますので、それも視野に入れていただきたいですし、なおかつ、そうした外国人の子どもを受け入れる保育所なり小学校なりの先生たちへの対応に配慮することが必要かなと思えました。

【玉腰座長】

ほかにありますでしょうか。

【柴田委員】

入澤委員の話に乗かって、私の経験を共有させていただきます。

10年以上、観光・宿泊業をやっていたのですが、そのとき、ハラルを重んじられている方々が来て、食べられるものがないということがありました。そこで、商品を買って、家で自炊する、ないしは、宿泊施設で自炊するということが多かったです。つまり、どう呼ぶかも大事ですけども、受け入れた後、どう過ごしてもらおうかという視点は確かに大事だなと思って聞いておりました。

もう一つ、外国人材として来てくださっている方々は今の札幌にはたくさんいらっしゃいますけれども、結局、その方々は、同じく外国から来た方々としか触れ合う機会がないです。これは前回の会議で出たような話に近いのですけれども、北海道大学に来ていただいた後、札幌の会社と接点がなく、道外に戻ってしまうということです。1年や3年、来てくださっても、札幌に住む私たちとの接点がないがゆえに、何かしらのスキルを得て、いい体験をしてもらえたかもしれないですけども、残るという判断が選択肢にないので、戻ってしまうとなると、来ていただいた方々に愛着を持った状態で出ていってもらおうということにつながらないと思うので、どう受け入れるか、どうコミュニティを醸成するかという視点もあるといいのかなと思いました。

【玉腰座長】

ありがとうございます。

ほかにありませんか。

【中田委員】

外国人材に関する話です。

今までの話と重なるところがあると思いますけれども、外国人の方が働きたい場所をつくる、仕事をしてもらう、あるいは、受け入れると考えたとき、まず、外国人の方に選んでもらえる国でなければいけないということがまず一つあると思います。

例えば、ある方が日本を選んだとします。その後、日本の中でどこを選ぶのかということも大事で、海外との競争、国内での競争ということがあります。今はどこも人が足りないということで、そうした話を聞いておきまして、そういった視点からも考えていかなければいけないということです。

そして、先ほども話が出ましたけれども、外国人は1万7,000人以上いて、そのうち、今、2,000人以上のベトナムの方が札幌に住んでおりますけれども、こんなに札幌市内にベトナム人がいるのかと思います。また、最近、インドネシアの方も増えています。でも、海外の方がいるのだという実態を皆さんは知らないです。

市民としてはどこかにいるのだらうなという感じで、一部では一緒に生活をするというようなこともあるのだらうけれども、そういったことを感じ取る機会がないということにはある意味でマイナスな部分があるのかなと思います。でも、国際的なことを考えると、海外の方と一緒に生活をするという感覚は、若い子といますか、子どもにも味わってもらいたいと思いますので、そういったことを含め、外国人と触れ合う機会をつくる必要があるのかなと感じます。

【丸山副座長】

外国人の雇用を拡大する、外国人を受け入れるという議論は、どうしても人口減少や労働力不足の文脈で議論されることが多いので、見せ方を工夫したほうがいいと思っております。

あまり工夫なく出すと、足りない分を外国人で何とかしてもらおうというふうに受け止められる情報になってしまって、恐らく、それでは外国人側としてもあまり積極的に乗ってこないような状況をつくり出してしまいますし、受け入れる側といますか、外国人が増えていく側の市民としても、場合によっては外国人を厄介事のように思うようなことが実際に起こっているわけです。そのため、外国人を受け入れるということ、外国人が職場に増える、地域住民として増えるということがその地域をどう変えていくのかをポジティブに見せるという情報の開示の仕方が必要かなと思います。

多様性、多文化共生の推進とあるのですが、多文化共生すると何がよくなるのか、どんなメリットが人々の生活にもたらされるのかです。ビジネスの面であれば、海外に市場を広げるようなことを打ちやすくなるなど、そういうことを念頭に置いて、単に数を補填するだけではないということを適切に示すことが大事かなと思います。

もう一つ、もう既にいろいろと意見が出ているのですけれども、生活する住民としての外国人という視点をもう少しはっきりと打ち出したほうがいいかなと思います。

在留資格の特定技能が2018年から開始されたときも議論されていたのですが、単純労働の外国人の受入れが進むことを好意的に受け入れるといますか、ようやくそういう議論が進んだのはいいのですが、同時に、受け入れる体制や社会環境として外国人が増えるということに対し、外国人の生活をどう支えるのかという議論は、その当時、まだ欠けているということがよく議論されておりました。

外国人児童への支援もそうですし、単純に外国語表記をしなければいけないものは増えると思いますし、札幌のような都市ではあまりないと思うのですけれども、東日本大震災のとき、農家に外国人のお嫁さんを迎え入れたようなケースがあったのですね。結婚して帰化すると、住民登録上、日本人になるのです。そして、行政は日本人だと認識しているから、東日本大震災の後の情報開示が日本語だったのです。でも、旦那さんを亡くしてしまった元外国人の女性が情報をほとんど取得できないということが起こっていたそうなので、そうした防災の観点から、どのように情報提供するのかということも必ず関わってく

るのだろうかと思います。

【玉腰座長】

ありがとうございます。

私から付け加えるとすると、大学に留学生としていらっしゃる方たちも結構多いのですが、その方たちがやっぱり戻ってしまうのです。本当に高度な教育を受けた人材として、単に労働力どうのということではなく、きちんと日本で教育を受けた方たちが日本、あるいは、ここ札幌にいたくなるような状況をつくるのがすごく大事なのだろうかと思っています。

北大も非常に留学生が多いのですが、どうしても定着せず、帰られてしまうのです。

それでは、外国人の話から離れて、次の話題に行きたいと思います。

7ページのところでほかに何か話題はありますか。

【吉岡委員】

7ページのことに関しては、資料の83ページの第4章第3節も含んでいるかと思いますが、市民が幸せになるための取組の強化に関し、いろいろな指標が出ていますよね。

具体的には、⑤の多様性の1項目に疑問がありまして、結婚して子どもを持つことこそ女性の幸福だと考える人が多いという指標なのですが、女性だけでいいのかなと思いませんか。こういうところにも少し配慮してほしいですし、なぜ女性だけがそれを問われるのかについては何かがあるのでしょうか。

【田村企画課長】

このポイントが高いことは決していいことではない評価になります。つまり、多様性に欠けているというものをあぶり出すための設問というイメージです。

【吉岡委員】

これはあくまで女性だけに聞いたほうがいいだろうということなのではないでしょうか。それとも、男性もこれに答えるということでしょうか。

【田村企画課長】

これは全員に答えていただくことを想定しています。

設問を見ていただくとお分かりかと思いますが、必ずしも該当することが良い評価につながるとは限らなくなっています。

【吉岡委員】

そういう意味で、これはあくまでも女性としているのですね。

ちょっと気になりました。もし何かの変更が必要でしたら、検討をいただきたいなと思います。

また、ウェルビーイングの指標についてです。

誰かが用意してくれたものに関して自分がこう捉えるというような内容に見えるのですが、そういう捉えでいいのでしょうか。

札幌市は市民が主役のまちづくりを目指しているわけで、自分たちで主体的に何かをつくっていくのだというような面も幸せなものの指標にもなるのかなと私は理解していたのですが、そこは問わずに考えていこうということなのですか。

前回、私は欠席してしましまして、その流れを把握できていないところもあるのですが、そういうことなののでしょうか。

【田村企画課長】

今の話についてですが、1や2は、どちらかという、自分にフォーカスした設問で、3や4は、自らの環境や状況で、5や6は外部も含めたものをイメージしてつくっています。

自分も幸せであること、それから、周りの環境も含め、自分がどういった位置にあるのかをあぶり出すような設問をつくりました。

また、先ほども申し上げましたとおり、数字が高いとよいのかという、そういう設問では決してなく、結果的にポイントが高かったことによって評価が低くなるものもあります。

【玉腰座長】

この指標につきまして、作成の経緯みたいなものを説明していただけると皆さんの理解が進むかと思います。どのような方法でつくられたか、もしお分かりになればお願いします。

【渡邊企画担当係長】

札幌Well-being指標につきましては、昨年度、札幌市民4,000人ほどを対象としたアンケートに基づき、作成いたしました。この45の設問になる前に100以上の設問を実験的につくりました。その設問のほか、市民の皆さんに書いていただいた1段階の幸せの度数との相関を分析し、その中で幸せとの相関が一定程度あるだろうという設問、キーワードなどを絞り込み、45の現在の設問を作成したところです。

【玉腰座長】

そうやってつくられたものを今後活用していこうということかと思います。

ただ、先ほどの83ページの表は、逆の意味を持つものがあるということです。ポジティブとネガティブで色を変えておいていただくと皆さんが理解しやすいかもしれないと思いました。

今のウェルビーイングのところに関して何かご質問やご意見はありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

【玉腰座長】

それでは、持続可能な都市の在り方の検討のところについては特にお話が出ていないように思いますが、お気づきの点や追加したいことなどはありませんか。

【丸山副座長】

3ページにバスの運転手を確保という文言があったと思うのです。市内路線バス運転手の確保促進とあって、これはもちろん進める必要はあると思うのですが、定時運行ではないデマンド交通のシステムが少しずつ普及しつつありますので、そういった物事にぜひリソースを割いていただきたいなと思います。

また、それが最後の持続可能な都市の在り方の検討の中に明文化されるといいのかなと思いました。

もう既にバスは減っております。そういうやり方ではないけれども、ちゃんと市民の交通は確保される、新しい仕組みづくりをするということが伝わるといいかなと思いました。

【田村企画課長】

具体の取組までは書いていないのですが、項目の一つに公共交通ネットワークを掲げております。長期的な検討項目の施策の在り方のところにあって、そのことも含めて検討を進めることとしております。

【玉腰座長】

念頭には置いていただけているということですね。

ほかにありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

【玉腰座長】

ほかにも関わる場所があると思いますので、前に戻って皆様のご意見を伺っていきたいと思います。

それでは、人口減少適応プロジェクトから一旦離れ、3ページからの人口減少緩和戦略

についてご意見を伺っていきたいと思います。

今までにもいろいろと出ていますけれども、もう少し踏み込んだほうがいいのではないかとすることがあれば、ぜひお願いしたいと思います。

3ページから4ページの前半の雇用創出と魅力的な都市づくりについてはいかがでしょうか。

【吉岡委員】

例えば、4ページの左側にMICEの誘致の強化、あるいは、その下のみどり豊かな都市づくりの魅力あふれる公園づくりや都心のみどりづくり、魅力向上に資する地域づくりと出ておりますけれども、全般的に行政と民間企業でまちをつくっていきますという視点に傾きがちに見えます。もう少し、市民の力でといいますか、市民自らが知恵を出し合っ力を発揮するのだというようなニュアンスを打ち出してもよろしいのではないかなと思いましたので、お伝えしておきます。

【玉腰座長】

ほかの委員からはいかがでしょうか。

実際にいろいろな活動をされている委員もたくさんいらっしゃいますが、そういった視点から表現をこうしたほうがいいというご意見はございませんか。多分、今の話は見せ方の問題が大きいだろうなと思いましたが、いかがですか。

【柴田委員】

質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりのことについてです。

訪れる人・住む人にとって魅力のあるまちの推進ということに赤字で書いてくださっているオーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた取組や市内観光施設への交通利便性向上に向けた取組というところです。

今、シェアリングエコノミー協会というものがあるのですが、私はその北海道支部を担当しています。様々な活動について全国のシェアリングエコノミー協会でも共有されているのですが、例えば、オーバーツーリズムが発生しそうな繁忙期に合わせ、駐車場として空いている場所があれば、市町村、もしくは、そこをお持ちの企業に貸していただくという共助、公助のような考え方で共有資産として貸し出し合うというような動きがあります。

札幌でいくと、7月、8月、2月が観光の繁忙期であり、主にここで人がたくさんあふれるだろうというものが大体予測できるので、そのとき限定でお持ちの資産や土地を貸し出し合うような共助が進んでいくと、何かしら新しい施設を建てなければいけないという発想から抜け出せ、乗り越えていけることができるかなと思うので、シェアリングをするというような発想はいかがでしょうかということです。

【玉腰座長】

そのほかにいかがでしょうか。

こういう文章にしてくれたら学生としては頑張りたくなるということはありませんか。

先ほどの吉岡委員の指摘は、これを読んだとき、自分事だなと皆さんが思えるかどうかだと思うのですよね。皆さんが自分事だと思って一緒に活動するのか、それとも、ああ、札幌市がやるのだなと思うのかということの分かれ目みたいなことだと思います。

岡田委員、もしよかったらどうぞ。

【岡田委員】

こういう書き方という話ではなくてすみませんが、質の高い雇用創出というものではアルバイトは考えられているのかなということが個人的に気になっていました。

先ほど外国人材のお話があったと思うのですけれども、うちのサークルにも留学生がいます。でも、アルバイトを探してもなかなか自分が働けるアルバイトがない、すごく賃金の安い単純労働ぐらいしかないというお話をしていた。

アルバイトという形態において自分が働きやすい環境がない、自分の専門性が生かせる環境がないとなってしまうと、どうしても愛着を持ちづらかったり定着しづらかったりするのかなと感じたので、留学生はもちろん、学生のアルバイトという視点は入っているのかなということが少し気になりました。

【田村企画課長】

ここに掲げている事業の中には恐らく含まれていないかなと思います。

すみません、私も不勉強なのですが、アルバイトに関する事業を私はあまり聞いたことがないです。

共生のほうもそうでしょうけれども、企業のご理解をどうやって求めていくのかは一つあるのかなと思って今伺っておりました。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【吉岡委員】

今、働き方のところでアルバイトの話も出ましたけれども、札幌に限らず、若い世代の人は、パラレルな働き方というか、一つの職業だけではないという時代になってきています。いろいろな顔があって、仕事を二つか三つやりながら自分の人生をつくっていくという生き方がかなり浸透しつつあるので、札幌ではそういう新しい働き方がしやすいぞというのが見えると戦略になるかもしれないと岡田委員の話を聞きながら思いました。

【山口委員】

今の岡田委員、吉岡委員の働くという観点はすごく大事だと思いますし、生活する上で働くことはやはり軸になると僕は考えているところがあります。働くことできちんと給料をもらえて、働くことでその時間を生かすといいますか、いわゆるワーク・ライフ・バランスの観点ですよね。つまり、どんな方たちでも、札幌に定着していただくためには、安心して働ける環境がまず大事になるのではないかなと思います。

それは、アルバイトの皆さんもそうですし、先ほどからお話があった外国人労働者の皆さんもそうで、日本人と同じ賃金や労働条件をしっかりと整え、札幌で働いてもらい、一緒に生活できるような環境をつくっていくことが必要なのではないかなと思いました。

【玉腰座長】

今の話は、3ページの(1)と(2)の両方に関わってくるものかなと思いました。ほかにいかがでしょうか。

【浜中委員】

私自身はウェルビーイングの研究室に所属しており、大学院で論文を書いたりしています。札幌Well-being指標を拝見させていただきましたが、すごくいいなと思いました。ただ、アンケートに答えて、幸せ度が上がった、下がっただけだと、もったいないなと感じています。

今の雇用政策の議論でいえば、例えば、イノベーションの創出に取り組む際に、ウェルビーイングの向上を目的とするのであれば、札幌Well-being指標のどこに効いてくると思ってこれをつくっているのかみたいなことをプロットしていくことがきっと大事かなと思います。また、GXを広げると安らかな毎日につながるだろうというようなことをやっていったとき、生きがいに関する施策が少ないよねという話になっていくと追加するというようなことができる気がします。

例えば、SDGsのマークが書いてあるという感じに近いことかと思うのですがけれども、そういうふうなことがやれるとどれに接続するかが見えやすくなるかなと思って見ていました。

【玉腰座長】

大事な視点でしたが、そういう観点も入れ、もう一度見直していただけるといいかと思いました。

中田委員、お願いします。

【中田委員】

まず、スタートアップに関することです。

人材の流出を防ぐという意味では非常に重要だと思いますし、大切なことだと思います。特に、これからは、GX、ラピダスなど、AI関連産業がこれから盛んになっていくだろうというような中で、その関連企業のスタートアップを世界から誘致するということも含めて非常に大事だと思います。そして、そのためにその営業の支援や企業誘致に関することを積極的にやってくような仕掛けづくりです。

例えば、既に行われているかと思いますが、例えば、ハッカソンのような世界大会やスタートアップの世界会議を札幌で開催し、見ていただく、あるいは、大会を開催することは、札幌で起業してもらうということにもつながるのかなと思います。

ただ、そのときには資金が非常に大事になってきます。そこで、例えば商工会議所や銀行などの金融機関もそうですが、そうしたところと密に連携をしていくという視点も入れていただければなと思います。

もう一つ、スタートアップにつながるかどうかは別として、事業承継の観点です。せっかくいい企業をなりわいとしてきたのに、事業を承継してくれる人がなかなかおらず、その企業を畳まなければいけないということが非常に多いのです。そのためのマッチングではないのですが、後継者がいないとき、誰かに継いでもらえますかという事業承継に関する観点のこともこれからは必要になるのではないかなと思いますので、そういったことにも触れていただけるといいのかなと思います。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【権平委員】

今、スタートアップの話が出ましたので、銀行という立場からお話をしたいと思います。

今、中田委員がおっしゃられたとおりで、まさにスタートアップ支援、誘致ということは、我々、金融機関も含め、札幌市と一緒にやっていかなければいけないものだと思います。

今、HOKKAIDO INNOVATION WEEKなど、いろいろと盛んにやられていますし、STARTUP HOKKAIDO実行委員会の立ち上げなどもやっていますよね。札幌をはじめ、北海道の中でスタートアップ企業を生み出していくというのは最重要課題だと思うのですが、道外のスタートアップをしようとしている人と話をしたときによく出てくる話が、北海道には実証実験の場としての魅力がすごくあるよねということです。

ですから、道内でスタートアップを生み出していくことにプラスして、道外企業の誘致ということで、実証実験のフィールドとして北海道を活用していただく、ひいては道内で事業をきちんと行っていただく、そんな流れが望ましいのかなと思いましたので、そうし

た視点もお考えになればいいのかなと思いました。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【柴田委員】

内容が一部かぶってしまうのですが、HOKKAIDO INNOVATION WEEKの取組が去年から始まっており、グローバル企業の誘致、また、グローバルマインドを持つ道内起業家の育成という二つのポイントがありまして、この取組は5年続くもので、すごくいいなと思っています。ただ、この取組というのは、ビジネス・ツー・ビジネス、ビジネス・ツー・ガバメントが主になっています。

この間、福岡でCOLIVE FUKUOKAというものがありまして、デジタルノマドと言われるフリーランス、平均年収1,800万円とされているのですけれども、そうした方々が世界36か国から300人集まったイベントがありました。これは主にビジネス・ツー・コンシューマーですけれども、すごく影響力のある日本最大級のイベントだった。ツー・コンシューマー、ツー・ビジネス、ツー・ガバメントなど、いろいろな視点から海外の皆さんと事業をどう創出していくかという観点はあってもいいのかなと思いました。

また、2点目はGXの文脈のところで英語ワンストップ相談窓口と書かれていたところについてです。

これはGX以外でもすごく必要だなと思っていて、イミグレーションなどもありますけれども、GX以外の領域における英語のワンストップの窓口、もしくは、英語相談窓口がどのように設置されているのかが気になりました。これは、今お答えをいただいてもいいですし、今後教えていただいてもいいです。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【堀井委員】

最近話題になったことですが、Snow Manのコンサートなど様々なイベントが重なって、札幌市で宿が取れないということがあったと思うのです。3ページの(3)の①の観光マネジメント機能の強化というところかと思いますが、札幌市へお願いといいますか、ぜひ強化してほしいなと本当に思っておりますし、見出しにしてもいいぐらいかなと思っています。

我が社も花火大会やマラソン、観光イベントなど、様々なものを仕掛けていますけれども、北海道マラソンと札幌市のイベントが重なると宿が取れないということがあります。

また、オーバーツーリズムのような状態になっており、毎回、それが問題になっています。それで、1度、観光事業者と札幌市との協議の場みたいなものをつくったと思うのですが、それがなかなか機能していないということがあります。ここを強化すると、恐らく、宿泊施設の方々も年間を通じて平準化され、観光客の方が訪れられる、交通機関もそれほど混雑しないといったことが期待できるので、ぜひとも強化してほしいなと思っています。

特に、今後、MICEなど、まだまだ伸びる分野があると思っていますので、それをやっていく上でも必要なことかなと思っています。

【玉腰座長】

ありがとうございました。

それでは、先へ進みましょう。

次は、4ページから5ページにかけての右側の結婚・出産・子育てを支える環境づくりについての確認や追加をお願いします。

【高橋委員】

子ども、子育てに関することですけれども、資料4の24ページに非複数子、第2子以上の子どもを持つ世帯が21都市中21位とあり、これがすごく低いところが私としては気になっています。出生数を伸ばしていかなければいけないということはあると思うのですけれども、結婚する方や第1子を持つようとする方を増やすより、第2子以上の子どもを持つ世帯を増やす方が、正直、目先の数で言うと、すぐに取り組めるのかなと私としては考えました。

ただ、何で第2子を持ってないのかです。26ページに非複数子の仮説が六つありますが、この仮説はどのように立てたのか、お伺いしてもいいですか。

【田村企画課長】

ここには六つ記載していますが、調査をする中では仮説を多数列挙し、横にある客観指標と突合しました。このときは、札幌市だけではなく、ほかのまちも含めました。そして、ある程度の相関があると見られたものを仮説として採用し、ここに並べております。また、分析結果も含めると、札幌の実情に合っているのかなと私たちとしては考えております。

【高橋委員】

この仮説の中になかったことで私がちょっと気になった視点が一つあります。

第1子出産時に育児のギャップを感じたという方が非常に多いということがあります。出産した後、こんなはずではなかった、こんなに産後がつらいとは思わなかったというふうを感じる方がすごく多くて、トラウマになったり、産後鬱になったりして、そのせいで

第2子はまだ考えられないという方が非常に多いように感じているのです。

20個の仮説の中にそうした育児ギャップという視点はあったのかは分かりますか。

【田村企画課長】

なかったと思いますし、仮説を立てたとき、指標として取れないものは少し難しいということもあったかと思います。確かにそうした話はあるだろうと思うのですが、具体の数字やデータとして拾えるかという、なかなか難しかったのかなと考えています。しかし、非常に大事な視点であり、おっしゃるとおりかなと思います。

【高橋委員】

第1子出産時に感じた育児のギャップを防ぐ方法はあるなと思っていて、その一つがアフターバースプランというものです。

出産するときに産院でバースプランを考えるようになってきているのですね。出産のときにどういうお産にしたいかをお母様が考えられるよう、助産師と話を決めていくというのですが、アフターバースプランというのは産後のプランを考えるというもののなのです。しかし、これがまだ全然浸透してなくて、助産師の中でも知らない方が非常に多いです、ママの9割以上の方が知りません。これは私もインスタでアンケートを取ったところ、そういう割合でした。

アフターバースプランを考えるとどんないいことがあるかです。

産後のイメージですが、女性は何となく知っているとは思いますが。でも、おむつは1時間置きに替える、授乳は3時間置きにある、その3時間の中で何ができるかなど、そういった具体的なイメージを持つことがすごく難しいのですけれども、そのイメージを具体的に、ここはママが頑張りましょう、ここはパパにお願いしましょう、ここはおじいちゃん、おばあちゃんに頼みましょう、ここは外部のサポートしてくれる人に頼みましょうということを事前にイメージしておくことで産後のギャップを埋めることができます。

そうしたアフターバースプランを出産するときのお母様方に必ず考えてもらえるように産院と協力するほか、札幌市としてプレママ学級、パパママ学級、両親学級というものをやっていくことがすごく非常に大事な視点だなと考えています。

【玉腰座長】

そういった観点では、今進めていただいていると思いますけれども、プレコンセプションケアを小さいうちからきちんと進めていき、自分自身を大事にして、人も大事にするということを身につけながら育っていくことが大事で、その範疇でとらえられるかもしれないなと思いましたので、検討をお願いしたいと思います。

そのほかにいかがでしょうか。

【入澤委員】

プレーパークのことについてです。

この言葉は初めて聞いた気がしています。これは、P a r k - P F I みたいなもので、民間企業がやることによって公園の魅力をアップするみたいなイメージのものですか。

前回、ここでの議論の中で、冬の子どもの遊び場がないから札幌ドームの芝生のところに滑り台をいっぱい置いたらいいと僕が言ったと思うのですがけれども、その延長線上の話でこれが来ていて、プレーパークが気になったのです。

【里政策企画部長】

プレーパークについてです。

今の都市公園に関してはいろいろな規制があって、例えば、ボールを使ってはいけません、あるいは、スコップで砂場以外のところは掘ってはいけませんなどがある。ただ、地域住民の方や子育て団体の方に一緒に入っていただき、極力、規制を排除しながら遊んでいただけるようにする取組のことを言っています。

【入澤委員】

そういうものは、今、札幌市のどこかでやっているのですか。また、それを広げていく取組があるということですか。

【里政策企画部長】

おっしゃるとおりですが、数がまだ少ないですが。

【入澤委員】

もう一つ、給食のことについてです。

持続可能な給食とあります。お金の話は置いておき、また、先ほど調理師云々の話もありましたけれども、子どもの貧困というものがあるのです。子ども食堂を見ていると、栄養がどうのこうということはもちろん、夏休みや冬休みが大変だとよく聞くのです。給食の在り方はもちろんですが、全体的に子どもの栄養を考えてあげられないのかなと思っています。夏休みの間も給食を出してくれるところが地域にもあればいいなと思いました。

【田村企画課長】

概要版の4ページをご覧ください。

放課後児童クラブとあります。放課後とついているので、放課後のみと読めますけれども、長期休暇といますか、夏休みや冬休みもやっています、毎日ではないのですが、何日か、昼食を出すという取組をされていて、それをもう少し拡充していこうと

いうものになりますし、おっしゃっていることはそういうことなのかなと思います。

次に、プレーパークについて、今のところ、札幌市で登録し、活動しているのは8団体ございまして、イベントをある程度定期的にやっております。

【入澤委員】

それには何かの法律があるのですか。

【田村企画課長】

いえ、札幌市と公園緑化協会とが連携し、やっているものです。週2日や週3日ぐらいで活動しております。

【玉腰座長】

体を動かす、遊ぶ場所の確保がプレーパークでないといけないということなのですか。言葉をここで規定してしまったために、かえって分かりにくくなったのかもしれないと思いましたので、検討をお願いします。

ほかにいかがでしょうか。

【吉岡委員】

プレーパークの用語が浸透していないということが判明しました。

でも、これは非常に重要な取組でして、全国的にも注目されており、全国でも取り組んでいる団体はいっぱいあり、結構な歴史もあります。札幌でも公園緑化協会が結構頑張っていて、市内では8団体がやっていて、子どもたちからは非常に高評価です。大事な文化といえますか、札幌の宝の一つだと思っております。

今の段階ではちょっとなじみがないのかもしれませんが、ぜひとも、これはこのまま置いておいていただきたいと思いましたが、よろしく願いいたします。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【柴田委員】

プレーパークについては僕も今調べて、意義を知りました。冒険遊び場とありましたけれども、すごくすてきなと思って見ていました。知識不足でした。

これは全国的な事例になってしまうのですが、経済産業省の事業で、家事支援サービス福利厚生導入実証事業というものがありまして、タスカジという家事をお手伝いする代行サービスの会社も参画しているのですが、国が3分の2の資金助成をして、残りの

3分の1をサービス提供企業と受入企業が負担をして福利厚生として提供する座組が設けられています。

高橋委員のお話を聞いて思ったことがあります。これは財政を圧迫するようなご提案になってしまい、大変恐縮ですけれども、例えば、産後ギャップに一番陥りやすい時期が3か月から6か月だと特定できるのであれば、その3か月間は家事代行サービス、ないしは、何かしらのサポートを市が助成しますなのか、何かしらの財源を活用してサポートしますよということで乗り越えられるような手だてがあるのではないかと、少し具体過ぎる話ですけれども、そういうことを思いました。

そういった取組を市単独、もしくは、企業と一丸となってやっていくことによって、第2子の出産に対して、または、第1子の出産に前向きになってくれるのかなと思いました。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【山口委員】

5ページの(3)の子どもが健やかに育つ環境の充実の①の一つ目のポツの多様な学びの機会の充実についてです。

子どもたちの段階から働くということや学ぶということかなと思っています。ただ、ここにもう一つ入れてほしいことがあります。学校時代からそうした学びの中で働くということや学ぶのは非常に大事だと思っています。ただ、働くにはルールもあるのだという観点も必要なのではないかなと思うのです。

私が所属しているのは労働組合でして、労働相談を受けるのですが、いろいろなワークルールを学生の段階からしっかりと知っておくということが大事なのではないかなと思うのです。

労働相談をしていますと、ワークルールをきちんと理解されておらず、労働者の方が非常に大変な思いをしているというケースがありますし、そういう相談を受けることが多い状況もあります。ですから、働くということはずごく大事なのですけれども、働くにもルールがあるのだという観点のものをに入れてほしいということです。

働く大人や社会、職業に関わる様々な現場に直接触れるという観点としてルールもあるのだという学びの場があってもいいのではないかとということです。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【浜中委員】

私も子育てをしていて感じるがあります。

小中高までのことは結構語られるのですけれども、大学へ行かせることを考えたとき、東京の私立に行きたいと言い出したらどうしようかな、それだと1,000万円はかかるよね、2人いたら2,000万円だよねという話になって、子育てをする上で大丈夫かなと不安に変わるものもあるなと思っています。また、大学のことまでは語られていないのかなと感じますので、子育てについては手離れする瞬間のところまで議論が進むといいなと思っておりました。

ドイツだったか、定かではないですけれども、大学生は交通機関を使うときは無料となっていますというところがあって、まちでそういう学ぶ環境を整えていこうということがあります。そういったことも進んでいると、親としては、大学生になるとき、できれば札幌に残ってねということの言いやすくなるかなということもあるかなと思いました。

高校までは結構語られているのですけれども、もう一段上まで行ってもいいかなという印象を受けました。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【高橋委員】

子育てのことで追加したいことがあります。

産前・産後ケアの充実についてお伝えしたいのですけれども、今、札幌の産後ケアについては充実しているのかなと感じています。去年の12月から病院でも産後ケアの助成を受けられるようにしたり、今年度、訪問型がつくられたり、充実しているとは思いますが、その一方、実際に利用されているお客様からよく聞くのは、産後ケアのために新しく人員を増やし、産後ケアを始めた病院がまだ少ないので、今あるリソースの中で頑張っけて受け入れている体制だということです。

例えば、お産がかぶると、1泊2日の間のほとんどの時間、結局、何も対応してもらえずに病室で過ごしていただけた、2泊3日の間、24時間以上、誰も来てくれず、泣いている赤ちゃんが2人きりだったというお声も聞いたことがあります。

また、これは6か月までとなっていると思うのですけれども、生後4か月を過ぎると赤ちゃんは人見知りが始まってきたりするので、人見知りが始まっている赤ちゃんは預かれませんかと断られたケースがあると伺っています。

私は、そういう話を聞くと、本当に産後ケアが充実できているのかなというちょっと心苦しい気持ちになりますし、産後ケアを専門でやっている方がまだ少ないのかなとも思っているのです、リソースを割くための何かの施策が必要なのかなと感じています。また、私たちは産後ケア事業を専門でやっているのです、こちらにもできれば助成を出してほしいと感じています。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【入澤委員】

先ほど産後ケアの家事代行の話がありましたが、これを機に言っておきたいなと思ったことがあります。

実は、外国人の家事代行のことで、東京、福岡、大阪は認められている、札幌は特区ではなかったから認められていなかったものの、認められたよねとこの間に聞いたら、いいえ、まだですと言われたのです。これについては、市長がそれを認めると言えば認められるらしいのです。今は認められていないと僕は聞いているのですけれども、それは本当なのですか。

【里政策企画部長】

国家戦略特区としての指定を受けましたが、どんなものをどう規制緩和していくかについては、これから国と協議しながら決めていくことになっています。

【入澤委員】

ベアーズという有名な家事代行の会社の社長は、実はもともと札幌にいた方でして、お話をさせていただいたとき、家事代行を使うということがすごいぜいたく品だと思われてしまっていて、そうした文化を変えたいとおっしゃっていたのです。当たり前のように家事代行を使う文化になればということで、欧米はもうそんな感じになっているわけですよ。そうすると本当に女性の社会進出が進むはずで、家事代行を使うということに対する皆さんの意識を変えていきたいのだと言っていたのです。

そういうことこそ市が率先して言うことがすごく大事ではないかなと思うので、ぜひ、ここに家事代行の推進といいますか、それを使うことは悪いことではないのだよということをもっと訴えていってほしいなと思います。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【吉岡委員】

少し多いのですけれども、よろしく申し上げます。

結婚・出産・子育て支援を支える環境づくりのところでは、不安という言葉が幾つか出てくるのですけれども、ここから始まっていいのかなということがあります。

例えば、(1)の①の結婚・出産・子育ての不安を緩和する支援体制の充実です。不安が当然というところからスタートしておりますよね。実際がそうなので、やむなしという

考え方もあると思うのですけれども、恐らく、私たちのような年が上の世代の人が子育ては不安だ、困難だという話ばかりするから、若い世代の人は大変なのではないか、怖いわ、避けたいなと思うと思いませんか。岡田委員、どうですか。

こういう未来を創生するプランに不安とあまりに打ち出すのはいかがなものでしょうか。全く使ってはいけないというわけではないのですけれども、不安を大前提とし、それを緩和するというような言い方については少し考える必要があるのではないかと思います。

また、これは後の話題にもつながりますけれども、若い世代へのアプローチということについてです。

①の結婚・出産・子育ての不安を緩和する支援体制の充実の一つ目の丸の若者の出会いの場づくりのところでは、オンライン結婚支援センターの運営等によりとあります。今はオンラインで様々な出会いの場をつくるということが当たり前になっておりますので、それはいいと思うのですけれども、その一方、もう少しリアルな場といいますか、これは結婚だけではないのですが、若者が出会う場面をもっと充実させたほうがいいのではないかと考えています。若者支援ということも含め、支援を充実してほしいです。

ひきこもりの人向けも含め、若者支援総合センターがありますけれども、それを少し拡大して若者活動センターが市内のあちこちにあつたらいいなと思っておりますので、それについてお伝えしておきます。

それから、②の子育て環境の整備・充実についてです。

二つ目の丸の多様な保育サービスの提供のところでも子ども誰でも通園制度のことが書かれています。時間単位で柔軟に保育園を使えるということで、大人にとっては非常に助かるといえば助かるのですけれども、子どもの権利条例を持っている札幌市といいますか、子どもの立場から考えると、ちょっと配慮が必要だなと思いました。全く知らないところにぼんと預けていいというのは大人の都合でして、もう少し子どもに対してもということも意識することが必要かと思えます。今の話はここに文言として盛り込めということではないのですけれども、これも大事にしておかなければいけないと思いました。

そして、同じところの三つ目の丸の放課後の居場所の充実についてです。

夏休みや冬休みに放課後児童クラブでの昼食提供を充実させていくということで、これはすばらしいことですし、進めていただきたいと思うのですけれども、児童会館の現状を皆さんはご存じでしょうか。地域によっては非常に子どもが多いところもありますし、小さな児童会館で放課後児童クラブをとということなのですが、学童保育の登録者数が300人超え、400人超えというところもあるのです。

全員が来るわけではないにしても、300人や400人の半分が来たとしても狭い児童会館の中にそれだけの子どもがいなければならないという状況についてはもう少し考えなければなりませんし、そのような状況の中で昼食提供をといてもかなり厳しいと思います。指導員の方たちは本当に一生懸命頑張っていらっしゃると思いますけれども、地域の登録児童数の偏りについては少し配慮しなければいけないと思っています。

また、5ページの(2)の子育てを支える地域社会の形成の①の子育て参加環境の充実についてです。

これは3ページのものと同リンクするといいますが、かぶるということで再掲と書いていますけれども、子育て参加環境の充実に関してもそうで、女性活躍の推進など、女性という言葉がどうしても多くなっているのです。もちろんあっていいのですけれども、男性というワードもあってしかるべきではないかなと思うのです。

例えば、子育て男性の活躍の推進みたいなニュアンスのことも同時に載せておかないと、やっぱり子育ては女性だよねというふうに受け取られるおそれもありますので、ここは配慮すべきだと思います。

また、働き方に関し、女性活躍の推進ということでは、個別の相談窓口を充実する、セミナーを女性向けに開くというようなことが書いてありました。それも必要なことですが、子育てをしている保護者の方たちの働き方、育児休業を取る取らないということに関しては、男性か女性かに関係なく、上司や会社や組織の問題ですので、マネジメントする人への教育のほうが大事なのです。

個人で何とかしろ、個人で勉強して何とかしなさいと言うのはおかしな話ですし、そうではないので、それがしっかりと分かるように示したほうがいいなと思いました。

さらに、②の地域における子育て支援についてです。

私の知人で、東海地方に住んでいた方と話したのですけれども、子育て中に赤ちゃんを連れていけると、札幌市では地下鉄の中で声をかけてくれる人が結構いる、そういう文化があるのですねといううれしい評価をいただいたことがありました。そういう声をかける人が多いまちという札幌の特徴があるのであれば、それがどんどん広まってほしいなと思っています。

そして、(3)の子どもが健やかに育つ環境の充実の①の多様な学びについてです。

体を動かす機会の充実、プレーパークの推進はもちろん、自然豊かな札幌ならではの子どもが健やかに育つ環境はたくさんありますので、そういったものをもっと掘り起こし、提供していただけたらいいなと思いました。

【玉腰座長】

たくさんお話しいただきましたが、受け止めていただいて、お願いしたいと思います。

それでは、先に進みます。

6ページへ行きたいと思います。

若い世代へ向けたアプローチの強化についてご意見やお気づきの点あればお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

【丸山副座長】

(2)の方の下から三つ目の点の困難を抱える若者等への支援についてです。

この文章の中身が女性のことに限定されているのですが、何かの意図があって女性を対象にするように記述しているのでしょうか。

【田村企画課長】

女性に限定していない事業ももちろんあるのですけれども、女性に限定した事業だけをピックアップして記載したものです。記載内容については考えます。

【丸山副座長】

これは、女性を対象にという言葉ではなく、10代後半から20代を対象にとするだけで問題なくなりますか。そういうことをやっているということですよ。

【浅村まちづくり政策局長】

この意図しているところは、過去の痛ましい虐待事件を受け、結婚を経ずに出産してしまうようなケースをどういうふうに救っていくかという観点からやっている事業をピックアップしたということがあります。ただ、ほかにも若者支援は幅広くやっていますので、そういうことが分かるように表現を変える必要があるかなと思います。

【玉腰座長】

ほかにかがででしょうか。

【中田委員】

左側の様々な出会いの創出の四つ目の黒ポツについてです。

キャリア教育の中で若年層に対して魅力を発信するということがありますが、ものづくり企業の魅力を発信と書かれているのですが、あえてものづくり企業とした意図はどういったことなのでしょう。

いろいろな企業がある中でもものづくり企業だけにキャリア教育の推進を小・中学生にするのですか。でも、札幌市内にはほかにもいろいろな業種がありますし、担い手を育成するという意味ではいろいろな業種にということもあると思うのです。もし意図があるのであれば教えていただきたいと思います。

【里政策企画部長】

これも先ほどとほぼ同じですけれども、既にやっている取組を羅列しているところです。表現としては、小学校や中学校におけるキャリア教育の例示の一つぐらいにして、例えば、若年層に対してもものづくり企業の魅力を発信するなどとして、例示だと分かるように修文することを検討させていただきます。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【柴田委員】

私ごとですけれども、北海道庁から北海道全体の地域おこし協力隊のアドバイザーとして委嘱を受けています。今、北海道には1,084名の地域おこし協力隊員がいるのですが、北海道全体の地域おこし協力隊を育成したり、見たり、北海道全体の情報発信をする協力隊の方が北海道庁の官民連携推進室に2名いらっしゃるのです。

その上で、札幌市で若者をターゲットとした移住促進と書かれているところに協力隊の活用を検討と書いているのは、札幌市として地域おこし協力隊を採用し、主に札幌市の情報発信、移住や定住の取組につながるような動きをしてもらうという認識で合っていますか。

【田村企画課長】

それを目指して頑張ろうとしているところです。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【高橋委員】

右側の若者に選ばれる札幌づくりの中に目指すべき将来の姿・子育て等の魅力の発信というところがありますが、今、実際に子育てしているママたちが札幌は子育てしやすいと本当に思っていないと、子育てのよさを共有することが難しいかなと思っています。

私がインスタグラムで札幌は子育てがしやすいと思うかというシンプルな質問をすると、いいえが80%だったのです。ほかの市町村と比べてそう感じると皆さんはおっしゃっていて、その理由として挙げられているのは、先ほどのプレーパークの話と近いかもしれないのですが、冬の遊び場がなく、札幌市でやっているところとしてはちあふるがあると思うのですが、そこぐらいしかないということでした。また、ほかの市町村のほうが充実しているということで、例えば、旭川市だと、産前・産後ヘルパー事業というものがあり、20回ぐらい来てくれるのです。そういったものがほかの市町村に比べて遅れているかなと感じています。

まず、今のママたちの満足度を上げないと子育てのよさを共有するのがすごく難しいかと思えますし、不満ばかりがどうしても出てきてしまうかなと感じます。一つでもいいので、何か大きく目立つような施策があればと思えますし、それを通して子育ての楽しさを見せていけるのかなと感じました。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【吉岡委員】

(1) の丸の四つ目の次世代の担い手の育成のところでもまちづくり活動という言葉が二つほどあり、まちづくり活動に若者も参加し、その機会を拡大させたいということですが、これはぜひ進めていただきたいなと思います。

札幌市にはまちづくりのための様々な応援の仕組みがあって、さぽーとほっと基金なんかも若者に対してぜひ使ってもらいたいなと思いますので、そういったものを大事にし、市民が自分たちのまちのためにいろいろなアイデアを出し、まちをつくっていくのだとなり、若いうちから力をつけてほしいので、これはどんどん進めていってほしいなと思います。

また、(2) の五つ目の丸の困難を抱える若者のところです。

なぜ10代から20代の女性と書いているのかという質問があり、説明があったとおり、2歳児の女の子の虐待死事件があって、札幌市としては薄野などでいろいろな支援活動を行っていますけれども、若い世代の女性以外でも、札幌市の地下街で暴れるような若い男の子がいるということもあります。先ほどの子育て世代のところもそうでしたけれども、実際に住んでいる若者たちの現状をしっかりと把握し、声も聞いて、中身を考えていったほうがよいのではないかと思います。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【浜中委員】

今のお話に関連したことです。

正確な数字は取れていないのですが、この前、10人ぐらいの学生に対し、親との関係はどうですかという質問をしたところ、10人中4人が親とはもう連絡が取れませんという話をしていたのです。大学進学を反対されていたけれども、自分に行くからと言ったなど、あまり相談できる関係性がないということだったのですが、そうしたことがだんだん増えていっているのかなという印象がありまして、孤立している大学生という問題意識があります。

また、大学の先生とお話をすると、地域活動に参加できる学生というのは一定程度裕福な子たちしか来ないのだよねという話をされていました。やはり、生活が苦しかったりするとアルバイトなどに時間を使わないといけないので、なかなか出てこられないのですよねという話も聞いていたので、その辺の現状も把握したいなと思っています。

そして、コロナのとき、困窮している学生への支援みたいなことを仕事としてやったの

ですけれども、学生が自分で自分を困窮していると認識するのがかなり難しいといえますか、白いご飯しか食べていませんけれども、頑張れるので、大丈夫ですみたいな感じでして、困窮しているというラインが違うといえますか、頑張れるからいいかなと思って、なかなか発信しないということがありますので、一定程度のガイドラインを設け、これを下回っていると相談したほうがいいよということがあると、あぶり出せるといえますか、我々が認知しやすくなるかなと感じました。

【玉腰座長】

若者の現状についてはいかがですか、岡田委員。

【岡田委員】

今おっしゃられていたように、自分で困窮しているかどうかを自覚するのは結構難しいなど感じています。

私も、以前、物資配給のお手伝いに行ったことがありますが、そこに来る人は、若者ではなく、上の世代の方ばかりだったのです。配っていたのは困窮している大学生がよく住んでいる地域だから、困窮している若者に来てほしかったのですけれども、上の世代の方しか来られなかったということです。でも、私の周りには結構困窮しているといえますか、生活が苦しい若者はいて、来たらどうかと声をかけたのですが、いや、自分が取りに行っているのかは分からないし、もっと困っている人がいるだろうからということで遠慮をする学生が多いなという印象は確かに私も受けています。

また、ちょっと別の話になるのですが、若い世代へ向けたアプローチの強化の（1）に道内市町村とのつながりの創出というものがこの文脈の中で登場していますよね。私はその背景が理解できていないのかもしれないのですけれども、どうしてなのだろうと思っ
ていまして、ここを知りたいなと思います。

【田村企画課長】

さっぽろ未来創生プランでは道外に20歳代の若者が流出しないようにしようという目標を掲げているということがあります。これが直接つながるものかはあると思うのですけれども、私たちの思いとしては、学生たちにいろいろと活動してもらって道内の市町村とのつながりを持ち、北海道に愛着を持ってもらい、そのままそのまちで就職したり札幌で就職したりしてほしいということです。あるいは、道外で就職したとしても、そのまちを気にしてもらいたいということなど、つながりを持つということが取組の効果としてあるのかなと考えております。

具体の数字などと言われてしまうと困ってしまうのですけれども、そういったことも含め、ここに掲載したということです。

【岡田委員】

札幌に住んでいるから、ほかの道内市町村ともつながることができ、それが札幌らしさになっていき、若者の愛着も呼ぶみたいな感じなのですね。

【玉腰座長】

ほかにかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

【玉腰座長】

そうしましたら、残り20分程度になりましたので、それぞれの内容に関するご意見はここまでとさせていただきますと思います。

活発にご意見をいただき、ありがとうございました。

今日が予定されている最後の会議となっておりますので、3回の会議を通じての感想、あるいは、市への要望や期待、さらには、皆さんの周りの状況といたしますか、こんなことが起きているというような情報提供など、何でも結構ですけれども、1人1分ぐらいで順番にお話をいただければと思います。

それでは、猪飼委員からお願いいたします。

【猪飼委員】

お疲れさまでした。

今まで中身の話は皆さんがされましたけれども、メディアといいますか、ラジオやテレビの職場で働いてきた観点から言います。

見せ方の話や表現の話はたっぷり出ていたと思うのですけれども、横文字が多くないですか。市民の皆さんでどのくらいぱっと分かるかです。

ウェルビーイングと言う必要はあるのか、ウェルネスの推進と言う必要はあるのかなどです。細かいことですが、そんなに横文字を使う必要はないですかと思っております。

ラジオで何かの記事を見てしゃべるときにも思うのですが、これはありがちなことですが、誰もが分かりやすいように表現を工夫するという視点も必要だと思います。

また、概要のほうでもやっぱりきちんとした文章でどうしてもなると思うのですけれども、具体例やイラストです。これにもイラストはちょっと入れていただいているのですけれども、イメージイラストではなく、中身にリンクするイラスト、あるいは、視覚的に分かる表現があってもいいのかなと思いました。

難しいと思いますよ。これだけの分量のものをそうしていくのは非常に難しいと思うのですけれども、そういったことを感じています。

そして、成功例です。具体的に何々に取り組みますと書かれているのですけれども、実際にそれはほかの地域ではどうだったのか、こういう成功例があるからそれに近いものを

やりたいです、やろうと思っていますなど、初見の人がどのくらいイメージしやすくつくるかです。これはつくり方の話になりますけれども、そのようなものができるにより伝わりやすいではないかと思えます。

この会議といいますか、ここにいる皆さんの話の中でまとまったものをどうかみ砕いて伝えるかが最終的には大事なではないかなと思いました。

【入澤委員】

私はIT推進協会の者という立場で参加していますので、デジタル面のところをいろいろと見せていただきました。雇用のところにも要所要所にITの言葉がありましたし、イノベーション、スタートアップ、または、人材育成等にも触れていただけており、我々業界としても札幌の基幹産業にしていくのだという強い思いを持ってやっておりますし、若者の育成にも力をより一層入れていかなければいけないなど非常に感じました。

また、お願いがあります。

1ページめくったときに、何か、標語となるビジョンというのでしょうか、田村企画課長の冒頭の説明のとき、何とか何とかの社会をつくりますみたいな言葉があったのですが、このプランといいますか、このビジョンはこういうものなのですかというものが探してもないのです。概要とかなんとかになっているので、こんな社会をつくるのですというメッセージ性の強い言葉を一言二言か並べていただけたらいいなと思いました。

もう一つ、札幌市に対してお願いしたいことです。

特区を活用し、外国人の活躍をとという話をしましたけれども、もう一つありまして、警備員です。警備員は、今、外国人は駄目なのです。駄目というルールにはなっていないのですけれども、事実上、住民票がなければいけないなど、いろいろなことがあって駄目なのです。それで警備会社がどんどん倒産しています。人がいないから、警備会社を畳んでいるのです。

それで何が起こるかというのと、警備が薄くなっていくので、事故が起きやすくなる、除雪もできなくなるということです。例えば、道路工事では、工事現場に立つ警備員がいないので、工事ができないのです。それでポットホールがなかなか埋められないでいます。警備員がいないことでこのように社会インフラを非常に脅かしている。

外国人が何で警備員をしては駄目なのかです。規制緩和の中にぜひ入れていただけたらと思います。

【岡田委員】

学生という立場でして、専門がない中で何について共有しようか少し難しいところではあるのですが、今日お話を挙がっていた大学に入学させるのに不安があるという話を聞いて思ったことがあります。

札幌では学生が運営しているシェアハウスがあるのですね。学生同士で運営したり、使

われていない家の形を変え、自分たちでやっているところもあって、このように目を向けてみると、学生側がちゃんと自分で生きようと思ひ、やっているものもあるので、そういうものがもっと使われたらいいなと思ひました。18歳や19歳くらいになると、自分で自立する方法を考えるということもあって、そういう視点は共有したいなと思ひます。

また、札幌市とのつながりということと言うと、学生は持ちにくいといひますか、持とうという意識になりにくいのかなと思ひているので、若い世代へ向けたアプローチの強化ということで、うちの大学との連携や道内市町村とのつながりをどうやってつくっていくのかは難しいでしょうけれども、大事なことになるのではないかなと思ひています。

【権平委員】

私は金融機関の立場として参加させていただきました。

全体の施策の中で、札幌市だけではなく、我々金融機関も非常に関連するものが多いなと思ひましたので、ぜひ一緒に協力して施策を進めていきたいなという感想を持ちました。

また、これは盛り込んでいただきたいなというものを言えば、金融・資産運用特区にせつかく認定されたので、その施策がもうちょっとあってもよかつたかなということです。

もう一つは、DMOです。それが入っていれば、より特色が出るのかなと思ひました。

これだけの資料をつくるのに恐らく相当な手間と時間がかかつたと思ひます。お疲れさまでした。

【柴田委員】

お疲れさまでした。

株式会社とけるという会社の代表として参加しています。横文字で申し訳ないですけども、コミュニケーションをデザインしていく仕事をしています。コミュニケーション、デザインにおいて教養を高めていくということで、例えば、LGBTQの方に彼氏、彼女はいるのかという聞き方をするのではなく、パートナーがいるのかというような聞き方をするなどです。ささいなことかもしれませんが、そういうことで傷ついたり、逆に喜んでもらえたりします。これは、国外だけではなく、国内でもたくさんあります。同質的な社会は滅びてしまうと思うので、多様な社会は歓迎すべきなのですけども、それに伴って接し方やコミュニケーションにおける教養の力を上げていく必要があつて、そうした社会を委員として一緒につくっていけたらうれしいなと思ひています。

また、2年前くらいですか、中田委員と一緒にタイミングで参画させていただいた当時はU35-SAPPOROという任意団体の話を中心にお話をさせてもらっていたのですが、2月に社団法人化することになり、若年層の方と一緒に札幌市のまちづくりに寄与できないかなと考えています。これはお願いしますというより、若年層にどう興味を持ってもらい、どう根づいてもらい、どう健やかに過ごしてもらおうのかについてもご一緒に話ができるようになるとうれしいです。

【高橋委員】

私は、子育て世代の代表として呼ばれたのかなと感じているのですけれども、産後ケアに関し、ママさんたちから悲痛な声が私にすごく届いております。子育て世代に向けて具体的に私たち札幌市はこういうことをこれからやりますので、みんなで一緒に子育てを頑張らしましょうという分かりやすい目立つものがあればうれしいなと感じていますし、一緒にできることがあればうれしいなと感じておりました。

【中田委員】

私は商工会議所の立場で出させていただきます、主に中小企業の支援、スタートアップ、労働環境をどうするかも含めて話をしてきました。

令和4年度から参加をさせていただきましたが、そのときには、GX投資、あるいは、半導体に関する話はまるっきり出ていませんでしたし、金融についてもそうでした。それがこういう形で出てきたというのは環境としては非常によくなったと思います。

例えば、IBMの研究所があるニューヨーク州では、最初は何もなく、周りからなぜこんなに投資をするのだと言われていたのですけれども、今の状態になるまでに10年がかかったと言っています。でも、10年、愚直にやり続けることができるかが成功の秘訣だという話を聞いておりますので、10年という長きにわたってこのプランを実行に移していただければと思います。

それとともに、スタートアップの支援、あるいは、誘致も大事だと思うのですけれども、先ほど少し触れましたように、既存の札幌市内にある企業での事業承継も含め、力を注いでいただくと札幌の活性化にもっとつながるかなと思っています。

そして、目指すべき将来の姿についてです。これは私の意見ですが、先ほど労働人口が減っていく中で外国人材の話が出されたかと思います。今後も札幌市内に外国人材が非常に増えてくる可能性が見込まれるということになると、そうした外国人との共生社会をどう築いていくかも重要な視点になるかと思うのです。これはあるべき姿になるのかは分かりませんが、外国人との共生を充実していくというような観点なんかも取り入れていただくとより深みのあるプランになるのかなと思いますので、よろしくお願ひします。

【浜中委員】

すごく有意義な議論ができたかなと思っています。ありがとうございます。

私の感じたことについてです。

今日の話の中で産業の基盤づくりのところではイノベーションやDXの話がいろいろと出てきたなと思っているのですけれども、一方で、子育てや若い世代へのアプローチのところではあまりイノベーション的な話が語られなかったなというような印象があつて、人方といいますか、労働集約的に解決しようみたいなことが議論されてきたかなと感じてい

ます。でも、例えば、大学生のデータをちゃんと取って、貧困の可能性があれば、ちゃんとアラートが鳴るようにするなど、一項目でもいいので、そちらにこそイノベーション的なものを盛り込んでいけるといいのかなと思います。やはり、産業と生活は結びついているはずで、産業だけで語られないように、生活の中でも我々がイノベーションを享受できるような施策があるといいのかなと感じました。

特に、今回は専門家の方々と集まってお話ができたので、混ざり合ったような施策となるような提言ができたらいいなと思っております。

3回にわたって、ありがとうございました。

【堀井委員】

これまでの意見と少し重なりますが、やはり、この力作をどう若者世代に、また、子育て世代に届けるかが課題だなと思っています。

既にある札幌市の取組にはかなりいい内容のものが多く、様々な施策をやっているのですけれども、それが届いているのかどうか、いつも課題に思っています。特に、情報を自ら取りに行く人はいいのですけれども、子育て中の方や若者の中には自ら情報を取りに行かない人たちも多く、そうしたことで格差が大きくなっているのかなと日々感じていますし、情報を取りに行かない人たちに対してどうアプローチするのか、また、そういった方々にどう情報を届けるのかを本当に考えてほしいなと思っています。

私はメディアの企業にいますけれども、既存メディアが伝えてもなかなか伝わらないということが最近が多く、SNSや動画、あるいは、インフルエンサーを駆使するなどしないとなかなか振り向いてくれないということもあると思うので、情報発信方法をぜひ考えてほしいなと思います。

これは札幌市に対する注文ということではなく、この課題は我々も一緒に解決していかなければいけない、一緒に考えていこうと思っていますので、よろしくお願いします。

【山口委員】

皆さん、お疲れさまでございました。

私も1回目からということですが、3回、いろいろと議論させていただきました。

1点お話をさせてください。

市内の路線バスの運転手の課題がこの中にもあったかと思えます。働く側としても、これは大きく重要な課題だと考えています。運転手たち、そして、そこで働く整備士の確保という二つの問題があるところです。

どういう状況かといいますと、確かに人手不足という大きな課題はあるのですけれども、雇用の流動化が起こっています。バスの運転手、または、整備士として定着できていないのです。運転手から話を聞くと、雇用時間は普通の方より2割長い、でも、賃金は2割少ないというような考え方もあるということを聞いています。

バスというのは、市民サービス、公共サービスだと思っておりますが、ここをしっかりと守っていく上では雇用の流動化を起こさせないということが必要だということです。バスの運転手や整備士としてそこの職場に定着をしていくというような働く側としての取組も必要なのではないかなと思います。ただ、これは一事業者だけでは解決できないのではないかなと思っております。まさしく、さっぽろ未来創生プランの案にもありますけれども、これが直近での大きな課題なのではないかなと感じています。

働く側としては、今、本当に大きな問題として捉えています。このプランにもありますけれども、直近の大きな課題ではないかなということの問題提起も含めてさせていただいて、発言としたいと思います。

ありがとうございました。

【吉岡委員】

会議に参加させていただき、様々な分野の方のご発言から本当に勉強させていただけたなと思います。札幌市の方にまとめていただいた資料からも勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

私は、今回のまとめの中では若い世代へ向けたアプローチの強化に期待しております。今、いろいろなメディアがあって、リアルで会うということをしなくても生きていけるのです。とはいえ、大学生と日々接していると分かるのですが、ちょっと田舎くさい感じの取組に喜んだりするのですよ。人との関わりはやっぱりうれしいのだなということがありますので、若い世代に向けたアプローチについては少し工夫したりそうしたアイデアを出したりしたらいいのだろうなと思いますし、札幌市は町内会活動が盛んですので、そういうところと若者をマッチングしてもいいのではないかなと思いました。

また、今回、メンバーの中に岡田委員が入っていたのがすごくよかったと思うのです。もちろん、ほかの委員からも刺激を受けましたけれども、札幌市ではこういう会議に必ず大学生を入れるというような取組をしてもよろしいのではないかなというぐらい、岡田委員の発言からは刺激を受けました。

どうもありがとうございました。

【丸山副座長】

私は、地域人口を専門にしている身としてここに呼ばれていると思ったのですが、人口減少の緩和と適応の姿勢が大事だということで、しっかりと反映していただいているのですけれども、分量を見ると一目瞭然です。緩和についてはすごくいっぱいありますが、適応は分量が少なくなりがちなのです。これは何をすることがまだ分からない状況にあって、手探りで進めているということの表れだと思っております。

何かしら事例としてうまくいっていそうなものは探すところなのですが、それをそのまま札幌市に持ち込んでうまくいくかということ、そういうわけでもないという難しさが

あるのです。

その中でも適応プロジェクトというものは必ず必要になりますので、札幌市では、前例踏襲にならないように、既存のルールを適切に変えつつ、柔軟に対応していただきたいなと思います。

それと同時に、大学の人間として言いますが、自分の住む市町村の中に複数の大学があるところというのは、全国に1,750市町村ぐらいあるうち、本当に一部しかないのです。そういう意味では、札幌市は学術関係のリソースが大変多い市町村と言えるかと思うのです。でも、それが十分に活用されていないのには大学側にも問題があると思いますし、行政側も研究として積み上がってきた知見を社会実装するというときの連携をもっとうまく取ってほしいと思います。ぜひ、これから先も大学と市役所との間での関係を強く持って、社会に還元していくような関係性をつくれたらなと思っております。

ありがとうございました。

【玉腰座長】

皆さん、ありがとうございました。

それでは、全体を通じ、事務局からもご発言あればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【浅村まちづくり政策局長】

会議の最後でありますので、私からご挨拶も兼ねて少しお話をさせていただきたいと思っております。

委員の皆様におかれましては、ご多用の中、6月、9月、そして今回ということで、3回にわたり、非常に貴重な意見をいただきました。

今年度の有識者会議は、先ほど吉岡委員からもありましたとおり、現役大学生の岡田委員をはじめとして、幅広い世代、そして、様々な分野の皆様にご就任をいただきました。いろいろな背景をお持ちの方々により、大変白熱した議論をいただけたなと思っておりますし、そうした皆様からの意見をプランに反映していく過程において、より充実したものをつくってこられたなと思っています。

そしてまた、今日も、外国人の話をはじめとして、今、社会が抱えている課題を幅広く捉えていただき、コメントをいただきました。人口減少ということがありますけれども、社会構造が変革する分岐点に我々はいるのでななということを感じていまして、このさっぽろ未来創生プランがその社会構造にいかに対応していくのかの道筋を示す大事な計画になるだろうと考えています。

所要の修正も行いますし、今日、そして、前回、前々回にいただいたコメントについては、我々まちづくり政策局だけではなく、関係部局とも共有し、各施策に反映していくということも進めていきたいと思っております。

そして、今日、大谷委員はいらっしゃらないのですけれども、第3子となる男の子をご出産されたということで、さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議を象徴するような出来事ではないかと思っております。

有識者会議については本日をもって終了となりますけれども、第3期プランの策定後は、このプランの進捗を検証しながら取組を推進していくこととなりますので、引き続きのご助言とご協力をお願いしたいと思います。

改めまして、本日は、お忙しいところ、誠にありがとうございました。

【玉腰座長】

ありがとうございました。

最後になりますけれども、私からもご挨拶をいたします。

皆様のご協力で非常に活発な議論ができたことを大変ありがたく思います。また、今日出されましたいろいろな意見をもう一度持ち帰っていただいて、さらにブラッシュアップをしていただければと思います。事務局の方々には、資料作成からまとめまで、いろいろと大変だったと思いますけれども、これはスタートだと思っています。

先ほども話がありましたが、単に市がやるよということではなく、市民が自分事として一緒にやれるようなものになっていくことが理想だと思います。ここにいらっしゃる委員の皆様はそういう力をお持ちだと思いますし、この会議名称も「推進」となっています。それも含め、これからもまた一緒にやれればと思っていますので、引き続きどうぞよろしくをお願いいたします。

5. 閉 会

【玉腰座長】

それでは、これもちまして会議を終了したいと思います。

なお、今後の情報提供やご相談などは、適宜、事務局からご連絡をいただくということをお願いいたします。

皆様、本当にどうもありがとうございました。

以 上